田村明　法政大学の日々を中心に　　　　　　遠藤　博　　　　　20151107

* 履修要綱から　　　　　昭和５６年（１９８１年）～平成８年（１９９６年）

法政大学法学部教授　　　　　　　　　都市政策（政治社会学）・演習

早稲田大学大学院理工学研究科　客員教授　都市計画特論

　**現代都市**「人類の作り上げた最も巨大な複雑な存在」

**都市政策**「人類にとっての望ましい生活の場とするための新しい政策」として位置付け。

「民主主義の基礎としての市民自治を生む」ための「市民の学問」であり、「市民自治の観点に立って」「都市がどう作られ、運営されていくか知るべきであり、また、何らかの積極的なかかわり方を持つべき」である。→「市民の政府」論の「市民」像

**都市**　　文明論として展開し、都市の発展の歴史を振り返り、２０世紀を「都市化の時代」２１世紀を「都市の時代」

**東京**　　９３年度から取上げ「東京がもともとどういう土地であったかを探り、いかにして都市が発生し、今日まで成長・変化を遂げ、さらに現在および将来にどのような課題を抱えているか」「都市の時代」の都市を代表するのに最も代表的なものとして検討

* 演習に向けた態度

　「参加者は地方都市出身者を歓迎する」とし、「出身地の都市や地域についての“まちづくり”“村おこし”“地域づくり”についてのレポートを提出してもらい、秋以降はこれについても発表」をもとめるもちろん「受講希望者は、次の参考書のうち少なくとも一冊は読んでおくこと」と学生の意欲を求め、「選抜は最初のゼミの時間に行う」と学生に伝えた年もある。参加型の活発な討議が交わされるゼミを模索していたのではないか。

* 教育者としての自負

「中央官庁・民間会社・民間都市プランナー・自治体などの場において、都市づくりや都市政策の実践を行ってきた。とくに、横浜市では自治体に入り、都市づくりの立案者・責任者として、”みなとみらい２１”、ベイブリッジ、港北ニュータウン、横浜スタジアムなど多くの事業を推進してきたし、土地利用やアーバンデザインなどの政策も立案・実行に当たってきた」と自己紹介し、「実践者の立場から、現実の都市の問題にいかに対応できるかも、折にふれ話してゆきたい」。

* なぜ教育者？

内村鑑三著「後世への最大遺物」→森敦愛読

金、事業の次に思想について検討。具体的には「著述をすることと学生を教えるということ」

　　クラーク→**内村鑑三**→矢内原忠雄、大塚久雄　　　田中正造、幸徳秋水、徳富蘇峰、有島武郎、

→1901齋藤宗次郎（眞生子夫人の祖父）雨ニモ負ケズのモデル？

[新渡戸稲造](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%96%B0%E6%B8%A1%E6%88%B8%E7%A8%B2%E9%80%A0)